

渋谷芸術祭 2022 コラム

「未完の街」

コンビニでその街の治安を知る。トイレの貸し出しについての張り紙だ。「ご自由にどうぞ」。

この張り紙がしてあるところは大体駐車場が広い。「一言お声がけください」。これは市内でもちょこちょこ見かけるが、たまに家族で経営しているコンビニなんかに当たると優しさに心がほぐれる。「トイレありません」。これはもうウソ。トイレはある。あるけど、貸したくない。断固とした意思が伝わってくる。渋谷にあるコンビニはほぼ、いや 100% と言っていいほどこれだ。カフェには人が溢れかえっていて、どこの店に入るのも土日は並ぶのは当たり前。

店の外にずらりと並ぶ椅子、そこには座りきれない人。スクランブル交差点は、多い時は一回で3000人以上が渡るらしい。その人たちはどこへ向かうのか。それぞれの坂を登っていく。

上京初の渋谷は円山町にあるライブハウスだった。道玄坂を登ってコンビニを右に曲がるとたかさんのライブハウスがある地帯がある。ラブホテルとクラブが混在している夜も眠らない場所だ。ビルの7階にエレベーターで上がって会場の中に入った時には、これから東京でなにかを成し遂げてやるんだと意気込んだものだった。あの日以上に自信たっぷりのライブをしたことはないし、今後もないだろうが、当たり前のように客の反応は薄かった。終演後共演した女性シンガーソングライターたちが甘いお菓子をもらったり同じアングルの写真を延々と撮られていたり長時間お客と話をしているのを見て困惑したりもした。その帰りに見た道玄坂は突然の雨が降ってきた影響でビニール傘が溢れていて、その様子をクラゲに喩えて歌にした。

東京に住んで14年。未だに渋谷に通い、ライブをしている。もう物販に出ることはなくなって写真を撮られたりはしなくなった。お客さんの数も少しずつ増えている。それでも、あの日渋谷で初めてライブをした日に決意した夢は叶っていない。そしてその夢は、もう叶うことはない。渋谷の街には誰かの描いては捨てられた夢が漂っている。それを生気に、新しいビルが建っているように思える。

何者でもない、可能性があると言えば聞こえはいいけれど、そんな夢だけで膨れ上がったパンパンのわたしは、小さいけれど働く場所があって、少しだけ求めてくれる場所があって、それ以外には何もない、興味のない、誰でもないわたしを許してくれる渋谷が好きだった。今も、それは変わらない。おまえはおまえでやれよ、と。

いつまでも変わり続け、完成することのない渋谷は常に新しいことを発信し続けている気がする。「あの頃がよかった」なんてまだ言いたくないから。裏切り続けろ。動き続けろ。変わり続けろ。誰でもないわたしの声が聞こえる。